



## 最後の一枚の葉 (6)

しかし、狭くて苔むした「プレース」の迷宮を通るときにはさすがの彼の足取りも鈍りました。

肺炎氏は騎士道精神に満ちた老紳士とは呼べませんでした。息が荒く、血にまみれた手を持った年寄りのエセ者が、カリフォルニアのそよ風で血の気の薄くなっている小柄な婦人を相手に取るなどというのはフェアプレイとは言えま



## 最後の一枚の葉 (7)

すまい。しかし肺炎氏はジョンジ  
ーを襲いました。その結果ジョ  
ンジーは倒れ、自分の絵が描いてあ  
る鉄のベッドに横になったまま少  
しも動けなくなりました。そして  
小さなオランダ風の窓ガラスごし  
に、隣にある煉瓦造りの家の何も  
ない壁を見つめつづけることにな  
ったのです。

ある朝、灰色の濃い眉をした多



## 最後の一枚の葉 (8)

忙な医者ガスーを廊下に呼びました。

「助かる見込みは — そう、十に一つですな」 医者は、体温計の水銀を振り下げながら言いました。

「で、その見込みはあの子が『生きたい』と思うかどうかにかかっている。

こんな風に葬儀屋の側につこうとしてたら、どんな薬でもばかば



## 最後の一枚の葉 (9)

かしいものになってしまう。あの  
お嬢さんは、自分はよくならない、  
と決めている。あの子が何か心に  
かけていることはあるかな？」

「あの子は — いつかナポリ湾を  
描きたいって言ってたんです」と  
スーは言いました。

「絵を描きたいって？ — ふむ。  
もっと倍くらい実のあることは考  
えていないのかな — 例えば男の



## 最後の一枚の葉（10）

こととか」

「男？」スーは びあぼんの弦の音  
みみたいな鼻声で言いました。「男  
なんて — いえ、ないです。先生。  
そういう話はありません」

「ふむ。じゃあそこがネックだな」  
医者は言いました。

つづく

